【特集②】中世の窓から

中世日本文学から見える風景――説話のススメ――

加美　甲多

はじめに

文学のひとつの分野に「説話文学」というものがある。説話文学とは説話や説話を集めた説話集をひとつの学問領域としてとらえた概念である。説話という字面だけを見ると、なんだか硬そうであるが、説話は実に柔らかい。説話とは「話すこと」や「ものがたること」であり、要はその時に語られていた話を集めたものが説話集なのである。わかりやすい例を挙げるなら、昔話や神話、伝説は説話の一種である。例えば、中世に語られていた腰折れ雀（舌切り雀）、瘤取り爺さん、わらしべ長者といった昔話は鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』に「文献（文字）」の形で見ることができる。また、書き残したかどうかを別にすれば、話を語るという行為は世界的に行われていた。つまり、話を語るという行為は世界的な視野で見ても極めて始原的な営みであり、説話は国境を越えて共有することができるのである。

ここで説話集の魅力をさらに挙げるなら、説話はひとつの話として独立した状態、その説話が複数で並んだ状態、その説話が集まって説話「集」として集合した状態が同時に存在していることである。説話は単にひとつの話が楽しめるだけではなく、その並び順（学術的には「配列」と呼ぶ）や最初と最後に配置された話等に説話単体とはまた別のメッセージが隠されている場合がある。これは例えば、現代の音楽ＣＤのアルバムを思い浮かべてみれば良い。ＣＤのアルバムはアーティストが曲の作成を繰り返して、集成したものである。その曲は一曲でも成立するが、その曲を並べることによって、曲の並び順からもＣＤのアルバムとしてのメッセージが見えてくることがある。これはアーティストがＣＤという媒体を用いて音楽の編集という行為を行った結果であり、

編集という行為は新聞や雑誌においても行われている。実際に説話集の制作者は、作者や著者と呼ばれることは少なく、編者と呼ばれることの方が多い。説話集の制作者は説話の編集という行為を行っているからこそであり、一種の編集者（エディター）なのである。この「編集者」の仕掛けた二重三重のメッセージを読み解くことも説話研究の醍醐味のひとつである。

論者は中世日本の説話集における伝本を中心として普段から研究しているが、本論では論文という形式にとらわれすぎず、中世日本の説話にこだわりながら、できるだけわかりやすく説話について論じてみたい。

一　説話とは

先に説話集とはその時に語られていた話を集めたものであると述べたが、語られていた話は全て説話の題材として候補となっていたのであろうか。逆に言えば、文学となるための何らかの「縛り」は存在しなかったのだろうか。実はここがまた説話の面白いところで、説話文学には縛りというものがほとんど存在しない。この自由度の高さこそが説話文学の武器であり、驚くほど好き勝手に編者が説話を集め、選び、並べることが可能であったのである。だから、時には「なぜ編者はここにこのような説話を配置しているのか」「どうして編者はこんなくだらない（ように見える）説話を選んだのか」といった場面に遭遇することがある。しかし、この時点でもうその説話集やそれを仕掛けた編者の魅力に引き込まれている。なぜなら、全てはその説話集の個性であり、無数に存在する話の中から編者が選択するという行為自体が既に高次の文学的営みであるからである。仮に語られていた話を自分が蒐集し、それらを並べて文字化するときのことを考えてみればわかりやすい。集めた話の中で、自分が本当に無意味である、またはくだらないと判断した話を果たして採用するであろうか。恐らく違う話を用いるはずであり、もし万人がくだらないと感じるような話を載せたのであれば、「くだらない話を集め、載せる」という立派な意図が存在するはずである。換言すれば、説話文学はその自由度の高さによって、極めて多様な次元の話が載っていて、他の文学分野では絶対に文学として成立しなかった「くだらない（ように見える）話」までもが読めるのである（当時の人々が本当にくだらないと考えていたかどうかは疑問であるが）。考えてみれば、説話集がなければ残ることはなかったであろう当時のくだらない話が読めることは何と貴重で贅沢なことではないか。説話文学の価値はここにも見出せる。

そういった説話集は中世に多く編纂された。特に鎌倉時代（一一八五年～一三三三年頃）は説話集の黄金時代と呼ばれている。中世の説話集は仏道に導くことを志向する仏教説話集と、仏道に導くことを志向しない世俗説話集とに大別される。鎌倉時代の説話集を挙げると、仏教説話集では『宝物集』、『発心集』、『閑居友』、『撰集抄』、『私聚百因縁集』、『沙石集』、『聖財集』、『雑談集』等、世俗説話集では『蒙求和歌』、『古事談』、『続古事談』、『宇治拾遺物語』、『宇治大納言物語』（散逸）、『世継物語』、『今物語』、『十訓抄』、『古今著聞集』、『唐鏡』等が認められ、各々の作品が個性のかたまりである。

では、そもそも説話文学や説話はどのように定義づけられるのだろうか。

長野甞一氏は説話文学について次のように述べている。[1]

説話文学の定義については古来いくたの説があるが、ここでは次のように規定しておきたいと思う。

それは「事実」または「事実」と信じられて語られてきたことを、文学化したものをさす。だから、「虚構」を生命とする「作り物語」とは、素材の点で区別される。

また、それが文章に定着する以前には、「話」として人人の口から口へと伝承された過去があるから、同じく事実を素材とするものではあっても、いわゆる「日記文学」や「歴史物語」とは、口承性の有無の点で区別される。

さらに、その「話」は普通、一気に話し終える種類のものをさし、長時間、幾日にもわたって語り継がれるものはふくまない。したがって、説話文学は短編的であり、長編的な構成は採らないのを原則とする。けだし、「話」の持続にはおのずから生理的な限界があり、長時間にわたるそれが困難なことに起因しよう。それに「事実」に対する即座の認識にはおのずから限度があって、多くの「事実」を同時に認識し、それらを組み立てて広範にわたる透視を得るには、「時」と「思考」とを必要とするからである。だから『平家物語』のような作品は「説話文学」の範疇には入らない。事実もしくは事実と信じられていたことに取材し、過去に語られた実績があったにしても、個々の事実を組織して長編構成の意図を有するからである。ただし、その中の或る部分、個々の事実に基づく小単位の「話」は、それだけ取り出して「説話文学」と称することが可能である。これは『大鏡』や『栄華物語』のごとき「歴史物語」においても同様である。したがって本辞典でも、それらの「部分」は説話文学として取り扱うこと

にした。（傍線部は全て引用者による、以下、同様）

長野氏の説話文学への見解を参考にすれば、第一に説話文学は口承性を有し、短編的であるということである。説話は基本的に語られた短い話を文字化したものという定義で、これは本論においても先に述べた。第二に説話文学は「『事実』または『事実』と信じられて語られてきたことを、文学化したもの」であるということである。読者や聴き手は最初から「虚構（作り話）」として受け取るのではなく、時には信じられないような話もあるが、これは本当にあった話なのだろうといった見方をしてくれるのが説話文学なのである。これが説話のミソである。ホントのようなウソの話もたちまちウソのようなホントの話に変換することができ、この変換こそが説話集編者の力量が問われる部分でもあった。このことから説話集は、事実かどうかをより曖昧にすれば当時の週刊誌のような役割、逆に事実度を上げていけば当時の新聞のような役割を持つことになる。事実度の調節が可能であることは説話の大きな特性なのである。第三にたとえ長編文学でも一部を切り取ることで短編の説話文学に創りかえることができるということである。長編の軍記物語『平家物語』であろうが長編の歴史物語『大鏡』であろうが、とにかく編者が気になった話は全て実話（エピソード）として、気になったその話のみを取り出して「説話化」できるというシステムなのである。いわば説話文学は長編物語の「おいしいところ」だけを抽出し、凝縮して並べることも可能なのである。これも説話文学の強みと言える。

また、高木史人氏は説話や説話文学について次のように述べている。[2]

「説話」ならびに「説話文学」ということばは、近代に入ってから、民俗学や文学などのジャンルとして認識され、その魅力を喧伝され、また研究の対象とされるにいたったものだと思われる。

説話や説話文学は、現在の形で用いられる以前、口承ではムカシ、イイツタエ、ウワサ、セケンバナシ、ゾウタン、モノガタリなどの口にし耳にするしかたで呼称されたり、書承では『日本霊異記』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『打聞集』『古今著聞集』『撰集抄』『雑談集』『三国伝記』などの名称に見られるように、記、撰（選）、集、拾遺、伝などの書物をまとめる呼称で呼ばれたり、あるいは昔、今、三国、日本などの時空をあらわす意味で呼ばれたり、宇治（大納言源隆国）などの説話や説話集にかかわる人名で呼ばれたり、霊異など

の話題を示唆するかたちで呼ばれたり、物語、打聞、著聞、雑談などの口にし耳にするしかたでよばれたりしてきた。いわば「口承文芸」「言語芸術」「謂れ因縁故事来歴」「街談巷説」などを幅広く含む人々のストーリーにかかわる言語活動の大部をカバーしてきたものであった。

いずれにしても、これらのストーリーの総称が、説話や説話文学という語で呼び習わされることによって、新たな領域が切り開かれたことになる。一般に、口承（ここでは口にし耳にするの意味にとらえておく）の説話は「説話」と、書承（ここでは書記し読書するの意味にとらえておく）の説話は「説話文学」と区分されてきた。

高木氏はこの引用部分の直後に「口頭」の説話を「説話」、「文字」の説話を「説話文学」として使い分けることの危険性や無意味さを説いた小峯和明氏の論を引用しながら「小峯の言にしたがうならば、口承の説話と書承の説話とをむやみに分け隔てることはないのである。以下、ここでもそれらを一括して「説話」と称することを基本にしよう」と述べている。論者も口承と書承とは不可分の関係にあると考え、説話や説話文学の細かな定義づけや使い分けは行わないが、とりあえず本論では、個の話を指す場合は「説話」、その集合体である作品を指す場合は「説話集」、それらの総称の場合は「説話文学」とした。

高木氏の見解において注目すべきは、第一に「説話」や「説話文学」は近代に入ってから認識され、また研究対象にもなったということである。これは当然ながら近代に入って急に『宇治拾遺物語』等の説話集が発見された、ということではなく、それまでも確かに存在していた説話や説話集というものに光が当てられるようになり、「文学」の一分野として認められるようになったということを意味している。簡単に言えば、昔話や伝説、短い話を集めたもの等は個々に存在してはいたが、それらを全てひっくるめて説話文学として総称するようになったのが近代という時代なのである。これによって、今までどの分野にも属することができなかった話も「説話文学」として分野化されることで説話の幅は劇的に広がり、また説話の文学的価値も認められるようになったと言っても過言ではない。同時に、研究対象になったのが近代以降ということから、まだ説話文学には未解明なことが多く、現在進行形で新たな発見が期待される分野でもある。第二に説話は「ウワサ」や「セケンバナシ」、「街談巷説」等も含んでいるということである。説話集の編者には情報収集能力が必要不可欠であり、いかにしてニュースソースを確保できるかという点が問われ

た。そのニュースソースは国内外、古今東西のあらゆる書物のみならず、その当時や過去に語られていたことを実際に話者から聴いて取材し、それを説話として伝えるという行為も行われていた。この点では説話集の編者はまさに現代の記者と変わらない。その説話が独自のものであればあるほど、説話の輝きは増すのである。ここから説話は「情報」と言い換えることが可能なのである。

二　和泉式部と藤原保昌

前章においては説話そのものについて考えてきたが、本章では具体的な事例を挙げながら中世の説話について見てきたい。

本章で取り上げたいのは和泉式部と藤原保昌との説話である。ご存知の通り、和泉式部は恋多き女性であると同時に『小倉百人一首』にも選ばれるほどの和歌の詠み手であった。一方、藤原保昌は源頼光に仕えていたともされ、酒呑童子を退治した説話で有名な頼光四天王に匹敵するほど武勇に優れていた。ここで両者の辞書的な説明を挙げる。(3)

いずみしきぶ【和泉式部】（生没年不詳）
平安時代中期の歌人。大江雅致の娘。母は平保衡の娘。長徳2年（996）和泉守橘道貞と結婚、小式部内侍を生む。夫と別居後、為尊親王、敦道親王の求愛をうけたがともに死別。のち中宮彰子（上東門院）につかえ、藤原保昌と再婚した。中古三十六歌仙のひとりで、「拾遺和歌集」などの勅撰集多数の歌がのる。「和泉式部日記」「和泉式部集」がある。万寿2年（1025）娘の小式部内侍に先立たれている。

ふじわらの-やすまさ【藤原保昌】（958-1036）
平安時代中期の官吏。天徳2年生まれ。南家藤原元方の孫。藤原致忠の次男。藤原道長の家司。大和、丹後、摂津の国守、左馬頭などを歴任、正四位下にいたる。武勇にすぐれ、盗賊袴垂をおそれさせた説話は有名。摂津平井（兵庫県）に住し、平井氏も名のった。和泉式部の夫。長元9年9月死去。79歳。

和泉式部はわかっているだけで実際に四人の人物と恋仲にあったとされ、特に敦道親王との恋愛は『和泉式部日記』に記されている。そして、藤原保昌（以後、保昌）は実質的には四人目の夫であり、最後の夫でもあった。また、娘の小式部内侍も歌の名手で『小倉百人一首』に選ばれている。

保昌が袴垂という盗賊を震え上がらせたという話は有名で、平

安時代後期の説話集『今昔物語集』巻第二五「藤原保昌朝臣、盗人袴垂に値える語、第七」や『宇治拾遺物語』巻第二の一〇「袴垂合二保昌一事」に載る。保昌は笛を吹きながら現れ、極悪非道で殺人すら何とも思わない袴垂と遭遇する。その後、袴垂が刀を抜いて斬りかかった時、保昌は振り向き「おまえは何者か」と尋ねた。ただそれだけである。この段階では両者はお互いが誰であるか、わからないのであるが、袴垂は保昌を見ただけでそのオーラに圧倒され、気を失ったようになり、このまま死んでしまうのではないかとまで感じるほどの恐ろしい衝撃を受けるのである。最終的に保昌の人間離れしたオーラを感じた袴垂は驚くほど素直になってしまう。笛を吹く優美な姿から何もせずして稀代のワルを黙らせてしまうほどの殺気という描かれ方。この話を読み、また聴いた人々はカッコイイ保昌像を想像しないわけがない。裏を返せば、伝説の盗賊、袴垂の危機管理能力の高さも浮かび上がる。

歌の名手で恋多き和泉式部。武勇に優れた保昌。ここで忘れてならないのは、このふたりが平安時代に実在した人物ということである。前章で見たように「実在」という前提さえあれば、史実かどうかは別として「説話的な事実」としての話はより形成しやすくなる。ましてやこれだけのふたりであれば様々なうわさも立ったはずであり、やはり中世において説話という形で残っている。そのひとつが貴船神社に参詣した折の和泉式部の説話である。次に『十訓抄』巻第一〇の一三の本文を挙げる。[4]

和泉式部が男の、かれがれなりけるころ、貴船に詣でたりけるに、蛍の飛ぶを見て、

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

とながめければ、社の内より、忍びたる御声にて、かく聞えけり。

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬のたま散るばかりものな思ひそ

そのしるし、ありけるとぞ。

『十訓抄』では「男」（保昌）が和泉式部のところに訪れなくなった頃の話である。和泉式部が貴船神社を参詣して、目の前を蛍が飛び交ったので、和泉式部は和歌を詠んだ。その内容は「（夫が来なくなったことで）深いもの想いに沈んでしまうと、飛び交う蛍も、私の身からさまよい出た魂なのではないかと見えます」と詠んだ歌で、それに対して社殿から目立たない声が聞こえ、歌を詠んできた。その内容は「山の奥で落ちて飛び散る水しぶきのような、そんな水玉みたいに魂が飛び散るまで物想いをしていけな

いよ」である。つまり、和泉式部が詠んだ歌に対して慰めの返歌が詠まれたという説話である。このままではわけがわからないがポイントは「しるし」である。「しるし」は、いわゆる「示現」を指し、返歌したのはなんと貴船の神様なのである。このことによって和泉式部と保昌との仲が元に戻ったことも暗示されており、和歌の力によって神をも感動させ、愛を復活させたという説話である。何より恋多き人として有名な和泉式部が実際には一途な心の持ち主であったことを『十訓抄』説話はよく伝えている。これは説話を読まなければ得られない情報である。ここが重要なのである。また、ほぼ同時期に成立した説話集『古今著聞集』巻第五には一七四話として『十訓抄』のこの説話を抄出という形でそのまま載せている。鎌倉時代の説話世界における、この説話への関心度の高さもうかがえる。

実はこの説話には出典（元ネタ）が存在する。『十訓抄』の成立は一二五二年であるが、和歌自体は既に一〇五二年勅撰の『後拾遺和歌集』神祇に二首とも載っている。恐らくこれらの和歌や左注（和歌に対する簡単な状況説明）をもとにして話ができ、説話化されたと考えられる。補足すると一一一五年に成立した歌論書『俊頼髄脳』において「男」は保昌を指すとし、出典では不明確であった「男」について見方が補強されている。いずれにしても蛍が飛び交う情景や神の示現等からは平安王朝的な世界が読み取れ、和歌の素材も勅撰和歌集を拠りどころとしている。『十訓抄』は鎌倉時代の説話集でありながら、この説話は平安王朝の面影を色濃く残している。これもこの説話の特性である。

設定は同様でありながら一二八三年に成立した『沙石集』巻第一〇末の一二には別の説話が認められる。次がその本文である。(5)

和泉式部、保昌にすさめられて、巫を語らひて貴布禰にて、敬愛の祭りをせさせけるを、保昌聞きて、かの社の木蔭に隠れて見ければ、年たけたる巫女、赤き幣ども立て廻らして、様々に作法して後、鼓を打ち、前を掻き上げて叩きて、三度廻りて、「これ体にせさせ給へ」と云ふに、面うち赤めて、返事もせず。「いかにこれ程の御大事思し食し立ちて、今これればかりになりて、かくはせさせ給はぬぞ。さらばまた、などか思し食し立ちける」と云ふ。保昌、「くせ事見てんず」と、をかしく思ふ程に、良久しく思ひ入りたる気色にて、

ちはやぶる神の見る目も恥しや身を思ふとて身をや捨つべき

かく云ひける事の体、優に覚えければ、「これに候ふ」とて、倶して帰り、志浅からず。

これをぞ、格を越えて格に当たれる姿なれ。若し格を堅く執して、前掻き上げて、叩き廻りたらましかば、やがて疎まれて、本意も遂げじ。

『沙石集』においても和泉式部が保昌に愛されなくなった頃の話であり、やはり和泉式部は貴船（貴布禰）神社を参詣する。そして、最後に和歌を詠み、保昌の心を取り戻したという展開は『十訓抄』と同様である。ところがこの説話は『十訓抄』と大きく異なる点が存在する。それは説話に巫女と保昌とが登場し、重要な役割を果たしている点である。以上を踏まえて『沙石集』の梗概を挙げる。貴船神社を参詣した和泉式部は夫とのよりを戻すために民間呪術的な「敬愛の祭り」を執り行う。それを面白半分で隠れて見物する保昌。巫女はその儀式として上品とは言えない、恥ずかしい動作を和泉式部に強要する。いよいよ面白くなってきたと陰から見続ける保昌。恥じらいを捨てきれない和泉式部は自慢の和歌を用いて「神が御覧になるのも恥ずかしい。思い悩むからといって、わが身を捨てるような行為ができるだろうか」と詠む。この和歌と和泉式部の姿勢に感動した保昌が和泉式部を連れて帰り、愛情が深まったという説話である。この説話に対して『沙石集』編者の無住は「格を越えて格に当たれる姿なれ」と評し、和泉式部は古い儀式に執着せず、こだわらなかったからこそ、愛情を取り戻せたと説く。

『沙石集』では、明らかに笑話仕立てとなっており、変な動作を強要する年老いた巫女、さらには傍線を付したように「保昌聞きて、かの社の木蔭に隠れて見ければ」や「保昌、『くせ事見てんず』と、をかしく思ふ程に」といった描写が認められる保昌は、いかにも道化的である。そして、この保昌は凶悪な犯罪者をオーラだけで黙らせた、あの保昌と同一人物である。もちろん、どちらが史実として正しい保昌に近のかといった議論も必要ではあるが、説話文学という観点から見れば、どちらの説話も間違いなく正しい保昌の姿を描いているのである。例えるなら、袴垂を震え上がらせた保昌がオモテの顔であれば、『沙石集』ではウラの顔を伝えている。そう考えれば、『沙石集』の説話によって頼光四天王にもならぶ武者である、あの保昌の意外な一面をのぞくことができるのである。女性にあきたり、いたずら心を持ったり、保昌も普通の人間として描かれている。人間離れしたオーラを見せた姿と、実直とは言えないがとても人間的な姿とは対極にあると言っても良い。中世の説話集では美醜、善悪を問わず、人間のありのままの姿が記される。これが中世における文学の特徴のひとつであり、そのまま中世という時代を象徴している。

加えて、『沙石集』の説話は和歌を含めて『沙石集』以外に全く認められず、いわば編者の無住が入手した独自のニュースソースによって得た貴重な情報でもある。『沙石集』には独自の説話が多く認められ、それはこの和泉式部と保昌とのやりとりが見られることからもわかる。無住は実際に東国、京、尾張等を行き来しながら、様々な話を集めていたのである。これも説話集という文学的な受け皿が存在したからであり、『沙石集』の説話が伝わっていなければ、保昌はカッコイイが、どこか人間味を感じず、非現実的な存在であったはずである。それがふたつの説話が存在することで、近づきがたく超人的な保昌も、辞書的な説明では決して捉えることができない親しみやすく人間らしい保昌も楽しめるのである。例えば、和泉式部はどちらの保昌に恋をしたのだろうか、といったような想像の世界もどんどん広がっていく。中世の説話から見えてくるのはそんな風景である。

三　平清盛という「人」

中古から中世への劇的な変化のひとつとして、政権が貴族から武士へと移り、政治の中枢が京から鎌倉へと移ったということが挙げられる。武士の活躍は軍記物語という文学分野を生み出し、武士という実際の人物が語られるといった点では、「事実」と信じられてきた話を好む説話の格好の材料ともなった。と言っても、中世は貴族が消え去って武士だらけになって、絶えず武士同士が戦いばかりを繰り返していたというわけではない。依然として貴族は存在し、僧侶等も活躍した時代である。もっと言えば、武士、貴族、僧侶を合わせても人口比率としては少数派で、圧倒的大多数は庶民であった。そして、政治の中枢は関東に移っても文化の中枢は京にあった。この二重性が中世という時代に与えた影響は少なくないのであるが、本論においては源頼朝が政権を鎌倉に移す直前の、いわば武士の時代の幕明けを象徴するような人物に焦点を当ててみたい。それが平清盛である。次に平清盛の辞書的な説明を挙げる。[6]

たいらの-きよもり【平清盛】（1118-81）
平安時代後期の武将。元永元年生まれ。平忠盛の長男。白河法皇の落胤とする説もある。平治の乱で源氏の勢力を一掃し、後白河上皇や二条天皇の信任をえる。仁安2年従一位、太政大臣となり翌年出家。娘の徳子を高倉天皇の中宮とし、平氏一門で官職を独占するが、鹿ヶ谷事件を契機に後白河法皇との対立がふかまり、治承3年法皇を幽閉し、政権を完全掌握する。以仁王や諸国の源

氏の平氏打倒の挙兵にあうなか、治承5年閏2月4日没した。64歳。通称は平相国、六波羅殿。六波羅入道。法名は静（浄）海。

平清盛（以下、清盛）は、「平氏一門で官職を独占する」、「政権を完全掌握する」とあるように、自らが権力をにぎり、「平家の時代」を確立した中心的人物である。しかし、ご存知の通り、その後、平氏は源氏に滅ぼされることとなり、清盛は同時に「驕る（おごる）平家」の代表的人物でもあった。鎌倉時代の軍記物語『平家物語』灌頂巻「女院死去」では清盛を次のように記している。[7]

入道相国、一天四海を掌ににぎ（ッ）て、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧ず、死罪流刑、思ふ様に行ひ、世をも人をも憚られざりしがいたす所なり。父祖の罪業は、子孫にむくふといふ事、疑なしとぞ見えたりける。

『平家物語』では入道相国＝清盛が全ての権力をにぎり、好き勝手に権力をふりかざした結果、平氏は滅んだと糾弾するのである。その最たるものが清盛の堕地獄、つまり清盛が地獄に堕ちたとする『平家物語』巻第六「入道死去」における「南閻浮提金銅十六丈の盧遮那仏焼きほろぼし給へる罪によつて、無間の底に堕ち給ふべきよし」という記述である。[8] 清盛から命を受けた息子が興福寺や東大寺等を焼き打ちし、寺院や仏像を焼き払い、僧侶のみならず、多くの庶民までを焼き殺してしまったのである。その結果、清盛は仏罰によって熱病となり、地獄の中でも最も厳しくつらい阿鼻地獄に堕ちたというものである。これによって清盛の非人道的な姿が印象づけられ、以後の清盛は文学の世界においても悪役（ヒール）としてシンボライズ化され、悪の代表として君臨することとなる。

文学において「事実」として語られてきた清盛像を顧みれば、地獄、それも八大地獄の最下層に堕ちても当然なまでの極悪非道ぶりであり、悪役としてふさわしい。実際に南都焼き打ちの場面等を読めば（聴けば）、清盛は血も涙もない冷酷な人間なのかと読者（聴き手）に感じさせ、その直後に水をかけても黒煙が上がるほどの熱病に犯された清盛が苦しみながら「あつち死に」していくことで、悪は滅びゆくという歴史的必然を決定づけている。ただ、これも史実であったかどうかは別として、清盛の全てであったのだろうか。一時的にでも政治の中心的人物となった清盛の人間的魅力が皆無であったとは考えにくい。例えば、鎌倉時代の歴史書『愚管抄』には清盛に対して次のような記述が認められ

る。[9]「清盛ハヨク〳〵ッ、シミテイミジクハカラヒテ、アナタコナタシケルニコソ」とあり、清盛は用心深く、物事を深く考え、心配りのできる人物であったと評している。『平家物語』から想起される清盛のイメージとは好対照の記述であるが、歴史書という性質からか、残念ながら具体的な事例は挙げられていない。そこで登場するのが、ここでも説話集なのである。先にも挙げた『十訓抄』巻第七の二七には次のような説話が見られる。[10]

かやうのかたは、福原大相国禅門のわかがみ、いみじかりける人なり。折悪しく、にがにがしきことなれども、その主のたはぶれと思ひて、しつるをば、かれがとぶらひに、をしからぬゑをも笑ひ、いかなる誤りをし、物をうち散らし、あさましきわざをしたれども、いひがひなしとて、荒き声をも立てず。

冬寒きころは、小侍どもわが衣の裾の下に臥せて、つとめては、かれらが朝寝したれば、やをらぬき出でて、思ふばかり寝させけり。

召し使ふにも及ばぬ末のものなれども、それがかたざまのものの見るところにては、人数なる由をもてなし給ひければ、いみじき面目にて、心にしみて、うれしと思ひけり。かやうの情けにて、ありとあるたぐひ思ひつきけり。

人の心を感ぜしむとはこれなり。

『十訓抄』では福原大相国禅門＝清盛の若き日の優しさの数々が具体的な描写を伴って描かれている。段落ごとに三種のエピソードが描かれているが、それらを整理すると次のようになる。

①清盛は、その人が戯れでやったことにはまったくおかしくなくても笑い、またどんな間違いを犯しても荒々しく声を立てることがなかった。

②清盛は、冬には年の若い侍たちを自分の衣の裾に寝かせてやり、寝坊をしていればそっと抜け出して思う存分寝かせてやった。

③清盛は、どんなに身分の低い者でもその家族や知人が見ている前では一人前の人物として扱った。

①②③からは人の心を喜ばせる清盛の求心力がよく伝わってくる。特に相手の立場に立つという人間としての大切な能力を十二分に兼ね備えていた清盛の姿が浮かび上がる。この説話が存在することで清盛の人間的魅力という新たな側面が見えてくるのである。

一方で、当然ながらこの説話がどういった意図で描かれたのかという視点も必要になってくる。例えば、そこに政治的な背景、反源氏の平氏側によって語られてきた説話として見ることもできる。また、実際の清盛は心優しい側面もあった、つまり前章でも見たオモテとウラの顔があったことを伝える説話かもしれない。もし「わかがみ」（若い頃）という表現に力点があるのなら、清盛が若い頃の心優しき姿を描くことで権力による心変わりの恐ろしさを説いているともとれる。まさに「諸行無常」である。想像の世界は無限に広がっていき、こういった想像から実証へと展開する新たな研究も生み出されていく。

いずれにしてもこの説話が存在することで、清盛という「人」の人間性の幅が広がり、シンボライズ化されて独り歩きしていく悪のみではない、素の清盛が垣間見える。やはりこれが中世の説話の特性であり、中世という時代なのである。付言するなら、『十訓抄』の清盛説話からは清盛という「人」を『平家物語』という先行したフィルターだけを通して見ることの危険性を説いているようにも見える。

おわりに

ここまで中世日本の説話にこだわりながら、説話について論じてきた。中世の説話は人間をどこまでも見つめている。考えてみれば、人間を描くというのは文学の基本原則と言え、説話にはその基本原則がより強く表れているからこそ、文学として私たちの心を揺さぶるのかもしれない。そして、中世の説話にはオモテ社会はもちろんウラ社会で暗躍する盗人（泥棒）や盗賊までもが活き活きと描かれるのである。例えば、鎌倉時代の説話集『古今著聞集』巻第一二においては「偸盗」という篇まで設けられ、どの説話も主役は社会的に見れば糾弾されるべきはずの盗人なのである[11]。本論においても具体的に見たように、人間のオモテもウラも伝えるのが説話の特性であり、その集成である説話集が最も数多く創出されたのは鎌倉時代である。説話の存在意義のひとつが人間をどこまでも見つめ、また人間を見つめ直すということであれば、中世は文学を通して人間を再発見しようとした時代と定義できる。そうであれば、数多くの説話集が創出されたことは中世という時代の必然的産物と言え、中世の説話集が発する光は確実に後世にも伝わり、近代には説話文学という文学分野まで成立させ

た。

史実という観点から見れば、説話にはホントのようなウソの話が多く存在し、歴史的には誤った情報や知る必要のない情報も認められることは確かである。しかし、中世の説話集の編者たちは実に個性豊かな形式や方法によって、史実では追いかけることのできない、その「人」自身と向き合うという試みを行い、その繰り返しが説話集という形で積み重なっていった。だからこそ、歴史に名を残すような人も、無名の武士も貴族も僧侶も庶民も盗人も、誰もが主役になれ、「説話」という平等な価値観の中で「人」として扱われたのである。何が正しいのか、正しくないのかという二者択一的な視点だけでは説話の魅力はいつまでも見えてこない。

注

(1) 長野甞一「説話文学概説」(長野甞一編、『説話文学辞典』、東京堂出版、一九六九年)を用いた。

(2) 高木史人「いま、説話を考える」(野村純一・藤島秀隆・三浦佑之・高木史人編、『日本説話小事典』、大修館書店、二〇〇二年)を用いた。

(3) 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修、『講談社日本人名大辞典』(講談社、二〇〇一年)を用いた。

(4) 浅見和彦校注・訳、新編日本古典文学全集『十訓抄』(小学館、一九九七年)を用いた。

(5) 小島孝之校注・訳、新編日本古典文学全集『沙石集』(小学館、二〇〇一年)を用いた。なお、米沢本の本文は漢字片仮名交じりであるが、新編日本古典文学全集では本文が漢字平仮名交じりに改められている。本論においても読みやすさを考慮し、そのまま用いた。

(6) 注(3)に同じ。

(7) 杉本圭三郎訳注、講談社学術文庫『新版平家物語(四)全訳注』(講談社、二〇一七年)を用いた。なお、全訳注は覚一本の本文である。

(8) 杉本圭三郎訳注、講談社学術文庫『新版平家物語(二)全訳注』(講談社、二〇一七年)を用いた。

(9) 岡見正雄・赤松俊秀校注、日本古典文学大系『愚管抄』(岩波書店、一九六七年)を用いた。

(10) 注(4)に同じ。

(11) 西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集(下)』(新潮社、一九八六年)を参照した。